

聖徳太子の片岡の飢人伝承と達磨寺創建縁起

『厩戸皇子が片岡山に行かれたとき、飢えた者が道端に倒れていた。名を尋ねたが答えなかった。皇子は飲み水と食物、それに衣服を与え、「安らかに眠れ」と言われた。

翌日使いの様子を見に行かせたところ、飢人は既に死んでいた。皇子は悲しまれ、その場所に築かせ埋葬した。数日後、近習のものに「先日の飢人は聖者であろう」と云われ、墓を見に行かせた。すると墓には遺体は無く衣服だけが墓の上に置かれてあった』

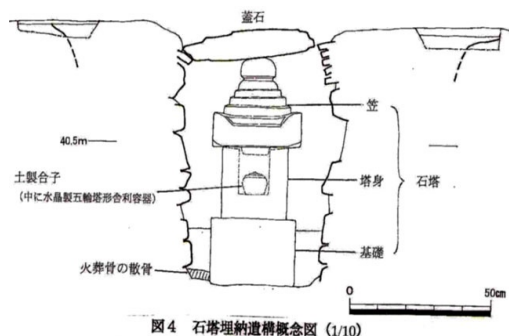
これは「日本書紀」が伝える片岡山の飢人伝説で、のちに聖徳太子が助けた飢人が、実は達磨大師の化身だったという考えが生み出されます。達磨寺本堂の下には達磨寺3号墳があります。人々はこの古墳が達磨大師の墓であると考えようになり、その上に本堂が建てられ、寺院が創建されました。

鎌倉時代の初めごろでその寺院は達磨寺と呼ばれたのです。

達磨寺本堂下に納められた供養塔

2002年、本堂の建て替えに伴う発掘調査で、本堂基壇の下から小石室に修められた石製宝篋印塔ほうきょういんとうが発見され、その中に水晶製五輪塔型舍利容器が入っていました。本来は地上に立てるべき石塔を地下の石室に埋納したもので、達磨大師を供養することを目的としたものと推定されます。

この石塔が埋納された時期は、14世紀前半とされています。室町時代の初めで、この時期は、達磨寺が興福寺の焼き討ちによって焼失した後の復興期にあたります。達磨寺の復興に際し、その安寧を祈願して創建説話に関わる達磨大師の供養塔が、その礎に埋められたのでしょうか。



本堂の下から
発見された石塔

聖徳太子の愛犬とその墓

達磨寺は臨済宗南禅寺派の寺院で、本堂内には木造達磨坐像（重文）、木造聖徳太子坐像（重文）、木造千手観音坐像などが安置されています。本堂北側には、室町時代の寺院復興を記録した石碑の達磨寺中興記石幢があり、これも重要文化財に指定されています。

他に、近年王寺町のユルキャラ「雪丸」のモデルの石造雪丸像が、本堂西の藤棚の奥にあります。神社にみられる狛犬とは違って、少し垂れた耳や、柔らかな犬の表情を写實的に表現した石造は、確かに愛嬌のあるもので、寺社に置かれた石像としては珍しいものでしょう。

雪丸は聖徳太子の飼犬です。人の言葉を話し、お経を読むことが出来、元日に吼えるといわれます。さらに自信を達磨寺の北東に葬るように遺言して死んだといわれ、達磨寺1号墳（現在石室の中を見ることが出来る）が、実は雪丸の墓で、ここで雪丸は達磨大師の墓を守っているのです。

雪丸がいつごろから達磨寺に居たのかは難しいところだが、江戸時代の大和名所図会（1791）には、達磨寺の境内に雪丸像が描かれてあり、このころには居たことは確かでしょう。面白いのは同じ大和名所図会の大和郡山の中に、聖徳太子の愛犬の犬塚があり、こちらは「白雪丸」という名前になっているそうです。聖徳太子は犬が好きだったという話は江戸時代には各地にあったようで、それは長い時間の中で作られた聖徳太子像の一つの姿なのでしょう。